

(協働版)

※(協働版)とは...

プロフィールを作成した27箇所の歴史的資産周辺において、地域のみなさまとの協働による景観づくりを進めるため、ヒアリングやまち歩きなどの取組を通じ、その地域固有の歴史的資産の特徴、まちの成り立ち、歴史、文化等といった地域ならではの情報や地域のみなさまの思いなどの情報を取りまとめたものです。

※古地図などは以下のホームページで閲覧できます。

京都市 景観情報共有システム

検索



新道学区

1 京都恵美須神社

凡例:

まち歩きやヒアリング
による情報等

文献等による情報

【周辺の特徴】

- ・面積の約半分を寺社が占め、住宅は宮川町通や大和大路通などを中心とする西部に集中している。
- ・恵美須神社は年間3回の例祭があり、商売繁盛・家運隆昌など周辺地域だけでなく、広く信仰を集めている。
- ・特に5月の神幸祭では、神輿が学区内を中心に巡行するなど、地域をあげたお祭りとなっている。

1 京都恵美須神社

1



京都恵美須神社

日本の臨済宗の祖である栄西禪師が建仁寺創建にあたり、その鎮守社として自身が南宋から帰国する際に海上で暴風雨から守ってくれた恵美須神を主祭神として祀り、建仁2年(1202)に建立された。1-1~1-5)

「恵美須」が正しい漢字表記である。



境内の松

境内の松は、建仁寺の流れである。昔から松の位置は変わっておらず、恵美須神社のランドデザインとなっている。

都林泉名勝圖會¹⁻⁶

(みやこりんせんめいしょうずえ)
現在、境内にある松と同じ松と思われる、宮司には代々言い伝えられている。



二の鳥居

二の鳥居は白川石でできており、単体の白川石による構造物としては日本最大のものである。

1月 例大祭 十日ゑびす大祭 (初ゑびす)



宵ゑびす祭(1月9日)と十日ゑびす大祭(1月10日)は夜通し開門され、商売繁盛・家運隆昌の吉兆笹が授与される。1月8日と9日の両日には「宝恵(ほえ)かご」が恵美須神社を参拝した後、市内に出て勇ましかけ声とともに吉兆笹を配る。十日ゑびすの賑わいは江戸時代・寛政11年(1799)に刊行された「都林泉名勝圖會」にも「十日笑祭」と記されている。1-1~1-5)



神幸祭神輿渡御巡行図

- 恵美須神社出発 → → →
 ① → → →
 ② → → →
 ③ → → →
 ④ → → →
 ⑤ → → →
 ⑥ → → → 恵美須神社到着
 (①~⑥は巡行休憩所)



建仁寺と恵美須神社

明治の神仏分離により一時的には交流が途絶えたが、5月の例祭には建仁寺から参詣が行われ、6月の建仁寺での開山忌には恵美須神社から雅楽の奉納が行われている。1-1~1-5)



5月 例大祭 神幸祭



氏子36ヶ町とのかかわりが深い、地域に密着したお祭り。御霊を移した神輿が氏子地域を巡行する。子供神輿も一緒に巡行し氏子地域の親交を深める機会となっている。5月第3日曜日に行われる。1-3)

現在は使用されていないが神社の神輿庫には京都最大といわれる古い神輿が収納されている。



子供神輿は3基あり、車付きの神輿は幼児が曳く。地域の子供たちがお祭りに参加することにより、貴重な文化が継承されていく。



過去には鼓笛隊だけでも300名近くおり、葵祭よりも大行列であった。この鼓笛隊の存在を忘れることはできない。

10月 例大祭 二十日ゑびす大祭 (ゑびす講)



「ゑびす大神」が海にお帰りになる「十日ゑびす大祭」と対をなし、海からおいでになられた旧暦の9月20日(現在の10月20日)に執り行われる祭典。1-1)

1月の十日ゑびすは「お願いのお祭」
10月の二十日ゑびすは「感謝のお祭」

その他



お火焚祭

湯立神楽が奉納され、各信徒崇敬者の氏名を書いた「片木(へぎ)」を焚き、「庭火」と共に家内安全・無病息災・商売繁盛を祈願する。11月16日に行われる。1-1)



名刺塚・財布塚

不用になった名刺入れ・財布の供養塔。9月第4日曜日に名刺感謝祭が開かれ、出世して不用になった自分の名刺や不用になった相手の名刺を庭火で焚きあげる。1-1)

煙草盆

建仁寺との分離の際、建仁寺から恵美須神社に贈られた。

■新道学区

2 寺社・地域コミュニティ等

凡例：まち歩きやヒアリング
による情報等

文献等による情報

【周辺の特徴】

- ・新道学区は、北は四条通で弥栄学区、南は松原通で大原学区、東は東大路通で清水学区に接する。
- ・建仁寺は、地域を代表する寺院であり、学区内に占める面積も大きい。
- ・様々な地域行事が盛んに行われており、地域住民の結びつきが強い。

地域コミュニティ

建仁寺

1



建仁寺

山号を東山(とうざん)と号す臨済宗建仁寺派の総本山。建仁2年(1202)鎌倉幕府第2代将軍源頼家が寺域を寄進し、栄西禅師を開山として宋国百丈山を模して建立された。2-1, 2-2)

2



四頭茶会(よつがしらちゃかい)

永治元年(1141)4月20日に生まれた建仁寺開山の栄西禅師の誕生日に合わせて、4月20日に開山降誕会として開催される。平成24年に京都市登録無形民俗文化財に認定された。2-1)

3



開山堂

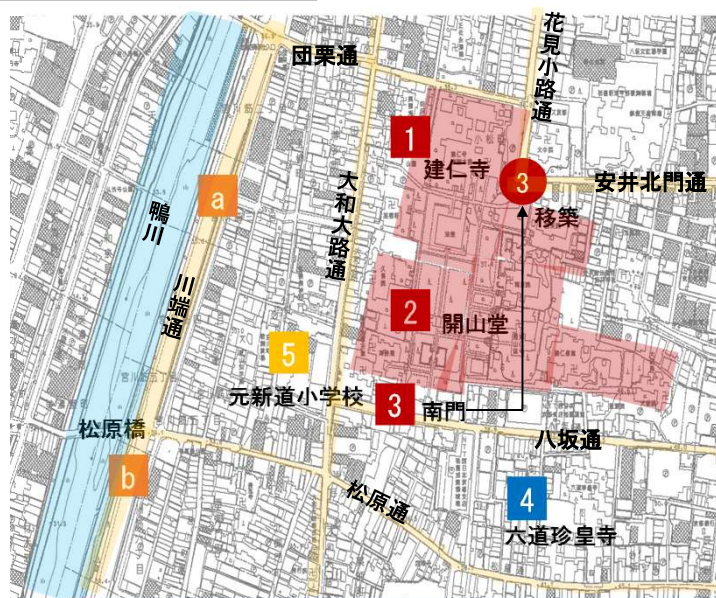
栄西禅師は自らの墓所を「ゑびす社」の正面に向かい西向きに建てるよう遺言した。

3



旧南門

大正2年に八坂通が開通した際、南門が建仁寺方丈の東口から安井北門通、花見小路通へ抜ける東北地角へ移築された。



地域

a



暗渠化前の疏水



疏水にかかる松原橋

b



架け替え前の松原橋



現在の松原橋

元五条橋(現松原橋)

寛文新堤により堤防が建設されるまで、今の太和太路通あたりまで鴨川であったようだ。洛中洛外図上杉本からも、中州をまたいで2本の橋が架かっている様子が分かる。鴨川では最も古い歴史がある。

5



元新道小学校

明治2年(1869)開校。昭和12年、鉄筋コンクリート造校舎に改築され現在の姿となる。平成23年3月、創立141年の歴史に幕を閉じる。現在は新道児童館・HAPSスタジオとして利用されるほか、地域の行事にも使われている。2-4, 2-5)



新道学区民体育の集い
例年、多彩な競技に老若男女が参加。



新道小学校150周年記念

「永久に茂らん新道の集い」

令和元年11月10日、音楽隊の演奏、舞妓さんの舞などのセレモニーに加え、もちつき大会や多くの模擬店が店出されて多数の来場者で賑わった。



地藏盆

町内行事として一番大切な行事である。大日地藏と延命地藏があるため、地藏盆を2回行う町もある。



昔は舞妓さんや六斎念仏を呼んで、盛大に行っていた。

広場が無いので、道路を通行止めにして、地藏盆と盆踊りを行っている町もある。

六道珍皇寺

4

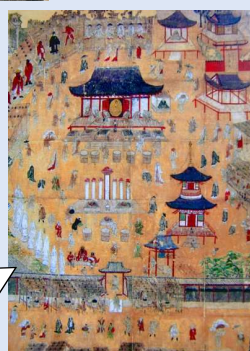


六道珍皇寺(ろくどうちんのうじ)

大椿山と号す臨済宗建仁寺派の寺院。毎年8月7日から10日に精霊を迎えるために参詣する「六道まいり」が広く知られている。参道で高野槇(こうやまき)を買い、水塔婆(みずとうば)に戒名を書いてもらい、迎え鐘を衝くことが参詣順序となる。2-2, 2-3)

珍皇寺参詣曼荼羅図

桃山期の作と推定され、精霊迎えの様子が描かれている。



■新道学区

3 町名・茶屋町の歴史

凡例：まち歩きやヒアリング
による情報等

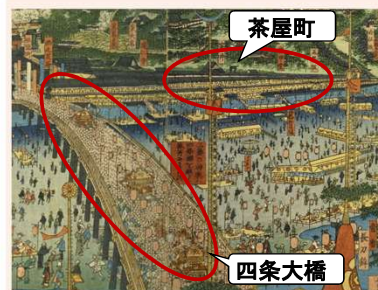
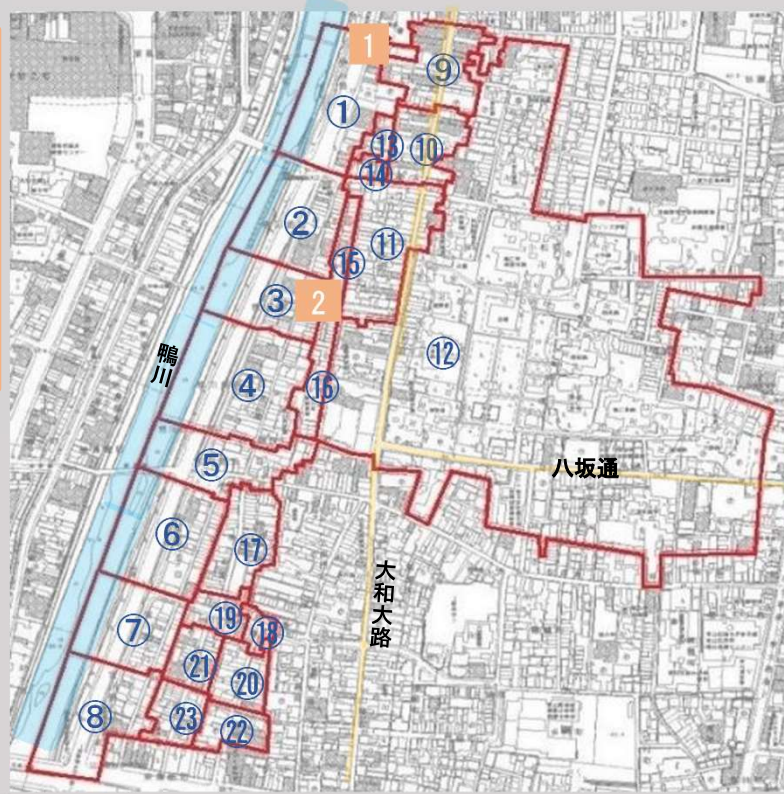
文献等による情報

【周辺の特徴】

- ・京都でも有数の花街で、毎年春に上演される「京おどり」で有名な宮川町がある。
- ・比較的細かく町内が分かれており、その町境も複雑である。

1 学区の町名

		町名
①	宮川筋通四条下ル	宮川筋一丁目
②	宮川筋通団栗下ル	宮川筋二丁目
③	宮川筋通蛭子園子上ル	宮川筋三丁目
④	宮川筋通蛭子園子下ル	宮川筋四丁目
⑤	宮川筋通松原上ル	宮川筋五丁目
⑥	宮川筋通松原下ル	宮川筋六丁目
⑦	宮川筋通柿町下ル	宮川筋七丁目
⑧	宮川筋通五条上ル	宮川筋八丁目
⑨	大和大路通四条下ル一丁目	大和町
⑩	大和大路通四条下ル二丁目	亀井町
⑪	大和大路通四条下ル三丁目	博多町
⑫	大和大路通四条下ル四丁目	小松町
⑬	大和大路通団栗上ル	井手町
⑭	団栗通大和路西入	六軒町
⑮	新道通団栗下ル一丁目	上柳町
⑯	新道通団栗下ル二丁目	下柳町
⑰	新宮川町通松原下ル	西御門町
⑱	柿町通大黒町西入	東河原町
⑲	柿町通宮川筋東入	西河原町
⑳	本町通五条上ル二丁目	森下町
㉑	新宮川町五条上ル二丁目	山田町
㉒	本町通五条上ル	金屋町
㉓	新宮川町通五条上ル	田中町



皇都祇園祭礼四条河原之涼
(こうとぎおんさいれいしじょうがわらのりよう)
安政5年(1859)四条大橋付近
祇園祭神幸祭。賑わう鴨川中洲や宮
川筋鴨川側に建ち並ぶ店から茶屋町
としての発展が見てとれる。3-2)



西御座神輿



団栗通から五条
通の間は側道が
あり、疏水が開
渠されている箇
所は、桜並木と
なっている。

八坂神社の氏子域である宮川
町では、7月17日祇園祭神幸
祭で神輿が渡御し、西御座の
神輿を団栗公園でお接待して
いる。

宮川町

1

宮川町

出雲の阿国(いずものおくに)につながる歌舞伎にゆかりがあり、宮川筋二丁目から六丁目までが花街とされる京都五花街の一つである。宮川筋三丁目から六丁目までは「祇園町南歴史的景観保全修景地区」の「宮川町地区」にあたる。鴨川の四条より南は祇園社の神輿洗いが行なわれ、この地区は宮川と呼ばれたとされる。3-3~3-5)



宮川町紋章。三輪は社寺・町家・花街の三者の結合をイメージしたものとされる。

2



宮川町通

宮川筋とも呼ばれ、沿道には花街が広がる。松原通以南は一筋西となり旧(ふる)宮川町通とも呼ばれる。四条大橋から松原橋までの間を、古くから「宮川」と呼ぶが、この「宮」とは祇園社(八坂神社)のことを指し、祇園祭の神輿を洗い清めたことに由来するとも伝わる。3-3、3-6、3-7)



宮川筋につながる東西の通りにも歴史的な町並みがある。



宮川町歌舞練場

昭和25年(1950)第1回「京おどり」が行われ、平成31年(2019)には第70回の公演を数えた。3-5)

東山女子学園

昭和44年(1969)に学校法人の認可を受けた舞妓・芸妓のための教育施設。3-3)



茶屋町として発展後、明治6年(1873)に女紅場の前身、婦女職工引立会社(翌年に女紅場と改称)が設立された。

歌舞練場は教育施設であり、また学んだことを披露する場でもある。



京おどり

毎年4月に上演される舞踏公演。毎年新作が披露され、京都の祭事記や年中行事が取り入れられ趣向を凝らした演目が楽しめる。昭和25年に宮川町歌舞練場で開催されたのが始まりである。3-3)



春の宮川町

宮川町歌舞練場界隈の疏水端は、桜の満開の景色となり、ほんぼりもしつらえられる。

新道学区 4 通りの特徴

凡例：

まち歩きやヒアリング
による情報等

文献等による情報

【周辺の特徴】

- ・歴史ある通りと新しい通りが混在しており、路地や辻子（図子）も数多い。
- ・地域の町並みは、花街の情緒あふれる宮川町通、建仁寺や恵美須神社の門前町としての大和大路通、商店が連なる松原通など多彩な表情がある。

1 大和大路通

京図
元禄9年(1696)

大和大路通は、かつての大和街道の一部にあたる。京羽二重（きょうはふたえ）（貞享2年(1685)）に四条以北を縄手通、四条から五条までを建仁寺町通、五条以南を大佛仁王通と呼ばれたとある。4-1~4-3)



都名所圖會（みやこめいしよずえ）
安永9年(1780)
建仁寺西門前(大和大路通)
人々の往来や建仁寺の垣根が描かれている。4-4)

2 柿町（垣町）通



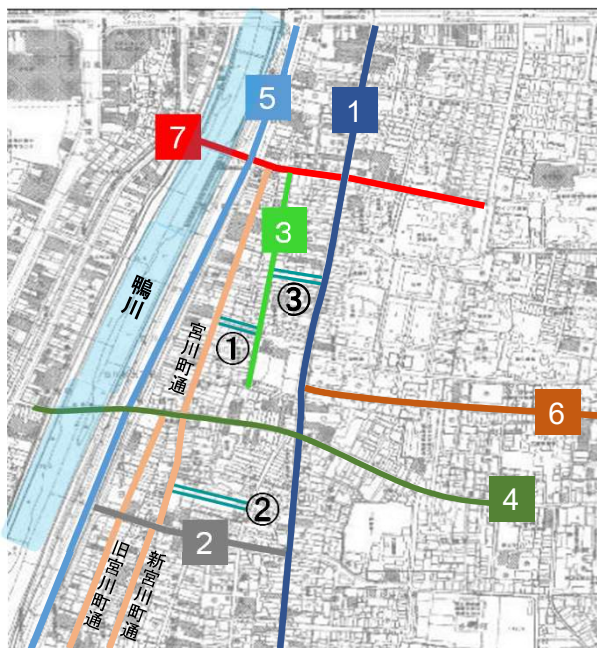
柿町通は、鴨川の石垣を町衆がお金を出して作ったというのがいわれである。

「柿」は本来「垣」であったが、いつの頃からか「柿」となった。柿町通りの突き当りには疏水があり戦後くらいまでは名残もあった。

3 新道通



新道通は、団栗通から元新道小学校南西に至るまでの南北の道。小学校西門、恵美須神社西門、歌舞練場東門にも面している。京町鑑（きょうまちがみ）宝暦12年(1762)には上柳・下柳の二町を挙げ「二町を俗に新道といふ」としている。4-2, 4-5)



4 松原通

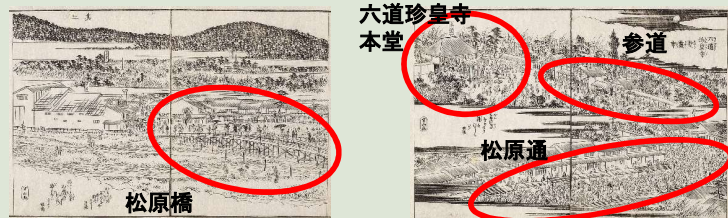


松原通は、平安京造営時には「五条大路」であり、清水寺への参道となっていたことから、早くから人家があったと思われる。4-1, 4-2)



建松商店街（けんまつしょうてんがい）
建仁寺町通（現大和大路通）と松原通の名にちなんで、大正の末より建松会として結成される。商店街の範囲は、当学区から六原学区弓矢町に及ぶ。4-7)

花洛名勝圖會（からくめいしょうずえ）元治元年(1864) 4-6)



芝居で賑わう松原河原

「六道まいり」の様子。人であふれる松原通から境内の様子が描かれている。

5 川端通

川端通は、鴨川・高野川の東岸を走る道路である。元々三条通以南は京阪本線の軌道であった。4-1)



昭和50年代の様子。鴨川・軌道・疏水・側道の様子がわかる。4-8)

昭和62年(1987)東福寺駅—三条駅間の地下化により三条通から塩小路通まで延長された。4-1)

現在の川端通
疏水側道

6 八坂通



八坂通(大正2年開通)は「祇園町南歴史景観保全修景地区」の「八坂通地区」となっており、無電柱化整備計画がある。4-9, 4-10)

木造建築が、繊細で雅やかな町並み景観を生み出している。

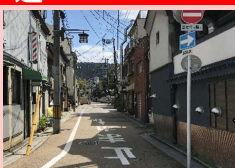
戦前から戦後しばらくまで、大きな邸宅が立ち並んでいた。

八坂通から眺める法観寺五重塔（八坂ノ塔）は、京町家などの切妻平入の伝統的な建造物が連なる町並みや、その背景となる東山が一体的に望見でき京都を代表する歴史的景観として親しまれている。



花洛名勝圖會 元治元年(1864)
建仁寺南門前(八坂通)当時の南門は勅使門ではなく自由に往来している様子がうかがえる。4-6)

7 団栗（どんぐり）通



大和大路通より東側は、明治時代に延伸された。

団栗通は、古くは団栗辻子（どんぐりのつじ）とも呼ばれた。鴨川に架かる橋が「団栗橋」、宮川筋角に「団栗公園」がある。4-2)

建仁寺周辺

1 京都恵美須神社

- 1-1 京都ゑびす神社 HP (http://www.kyoto-ebisu.jp)
- 1-2 『京都・山城 寺院神社大事典』平凡社 (平成9年)
- 1-3 『恵美須神社神幸祭を訪ねて』恵美須神社
- 1-4 『宮司が語る京都の魅力』P H P 研究所 (平成22年)
- 1-5 『平成十四年壬午年 御鎮座八百年奉祝祭記念』京都ゑびす神社 (平成14年)
- 1-6 『都林泉名勝圖會』国際日本文化研究センターデータベース (http://www.nichibun.ac.jp/meisyoze/rinsen/c-pg3.html)

2 寺社・地域コミュニティ等

- 2-1 建仁寺 HP (https://www.kenninji.jp)
- 2-2 『京都・山城 寺院神社大事典』平凡社 (平成9年)
- 2-3 六道珍皇寺 HP (http://www.rokudou.jp)
- 2-4 『新道-百周年記念誌-』新道小学校創立百周年記念事業委員会 (昭和45年)
- 2-5 『閉校記念誌 新道-輝ける141年のあゆみ-』京都市教育委員会 (平成29年)

3 町名・茶屋町の歴史

- 3-1 『京圖名所鑑』菊屋長兵衛出版 (安永7年)
- 3-2 『皇都祇園祭礼四条河原之涼』国立国会図書館デジタルコレクション (http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1310174)
- 3-3 宮川町公式 HP (http://www.miyagawacho.jp)
- 3-4 『亡くなった京の郭 (下巻)』田中緑紅著 京を語る会発行 (昭和33年)
- 3-5 京都市HP 歴史的景観保全修景計画 (https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/page/0000016167.html)
- 3-6 『角川日本地名大辞典26京都府上巻』角川書店 (昭和57年)
- 3-7 『京都市の地名』平凡社 (昭和54年)

4 通りの特徴

- 4-1 『角川日本地名大辞典26京都府上巻』角川書店 (昭和57年)
- 4-2 『京都市の地名』平凡社 (昭和54年)
- 4-3 『京羽二重』水雲堂 (貞享2年)
- 4-4 『都名所圖會』国際日本文化研究センターデータベース (http://www.nichibun.ac.jp/meisyoze/kyoto/c-pg1.html)
- 4-5 『京町鑑』白露著 (宝暦12年)
- 4-6 『花洛名勝圖會』国際日本文化研究センターデータベース (http://www.nichibun.ac.jp/meisyoze/karaku/c-pg4.html)
- 4-7 京都市観光協会 京都観光Navi (https://ja.kyoto.travel/tourism/single02.php?category_id=4&tourism_id=1203)
- 4-8 『京阪百年のあゆみ』京阪電気鉄道株式会社 (平成23年)
- 4-9 京都市HP 歴史的景観保全修景計画 (https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/page/0000016167.html)
- 4-10 京都市HP 無電柱化の推進 (https://www.city.kyoto.lg.jp/kensetu/page/0000250605.html)